

2015年度 本州太平洋におけるサケ回帰状況 (第4報：12月31日現在)

国立研究開発法人水産総合研究センター
東北区水産研究所 沿岸漁業資源研究センター

- ・12月31日現在までの本州太平洋側の地域全体のサケ来遊数は前年および平年を下回る
- ・震災翌年に放流された4年魚(2011年級)の河川捕獲数は、2011年級の放流数の増減と捕獲数に関連性が見られない河川が散見される。
- ・震災年に放流された5年魚(2010年級)の河川捕獲数は、津波被害が甚大であったサケふ化場を有する河川で減少が顕著

1. サケ来遊概況

12月31日現在の本州太平洋側(竜飛岬から東の青森県～茨城県)におけるサケ来遊数(沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計)の累計値は598万尾^{※1}(前年同期:71%)と前年を下回り、平年同期(1989～2014年の平均値、1,406万尾)との比較では43%という状況です(図1)。

河川捕獲数の累計値は71万尾(前年同期:92%)と前年を下回り、平年同期(128万尾)との比較では55%となっています。なかでも岩手県、宮城県において、前年比がそれぞれ74%、69%と低調であり、河川捕獲親魚だけでは種卵が不足し、沿岸漁業の自主規制や海産親魚からの採卵が行われました。その結果、採卵計画数に対する充足率は、岩手県および宮城県でそれぞれ93%、97%となっています。

※1:青森県(太平洋)、岩手県、宮城県の河川捕獲数および沿岸漁獲数(12月31日現在)、福島県および茨城県の河川捕獲数(12月31日現在)の累計値

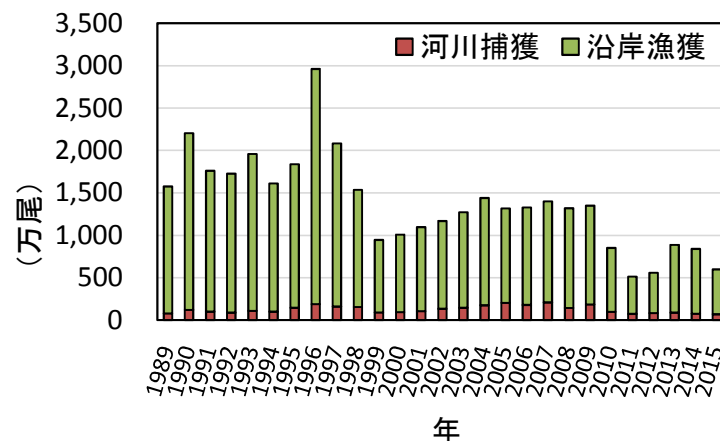


図1 8月1日～12月31日までの本州太平洋側におけるサケ来遊数(累計値)の経年変化

2. 4年魚および5年魚の河川捕獲状況と年齢別河川捕獲数

12月31日までの年齢査定結果により、主群となる4年魚および震災年に放流された5年魚の河川捕獲状況、年齢別の河川捕獲数をまとめました。

今回お知らせする河川および各河川におけるサケふ化場の被災状況を図2に示します。



図2 2015年度 年齢調査河川（左図）および各河川におけるふ化場の被災状況（右表）

・4年魚（2011年級）の河川捕獲状況（図3）

放流数が震災前（2009年級）の80%以下となった、田老川、片岸川、盛川、気仙沼大川において、顕著に捕獲数が少なくなった河川はありませんでした。

また、放流数が震災前の80%以上に回復した、川内川、奥入瀬川、新井田川、安家川、北上川において、川内川、北上川は2006年以降の平均よりも少ないですが、新井田川、奥入瀬川は2006年以降の平均よりも多く、安家川は2006年以降2番目に多くなりました。

さらに、放流数が震災前の123%と増加した織笠川においては、2006年以降最も少なくなりました。

以上のように、放流数と4年魚の河川捕獲尾数には明確な関連性が見られませんでした。

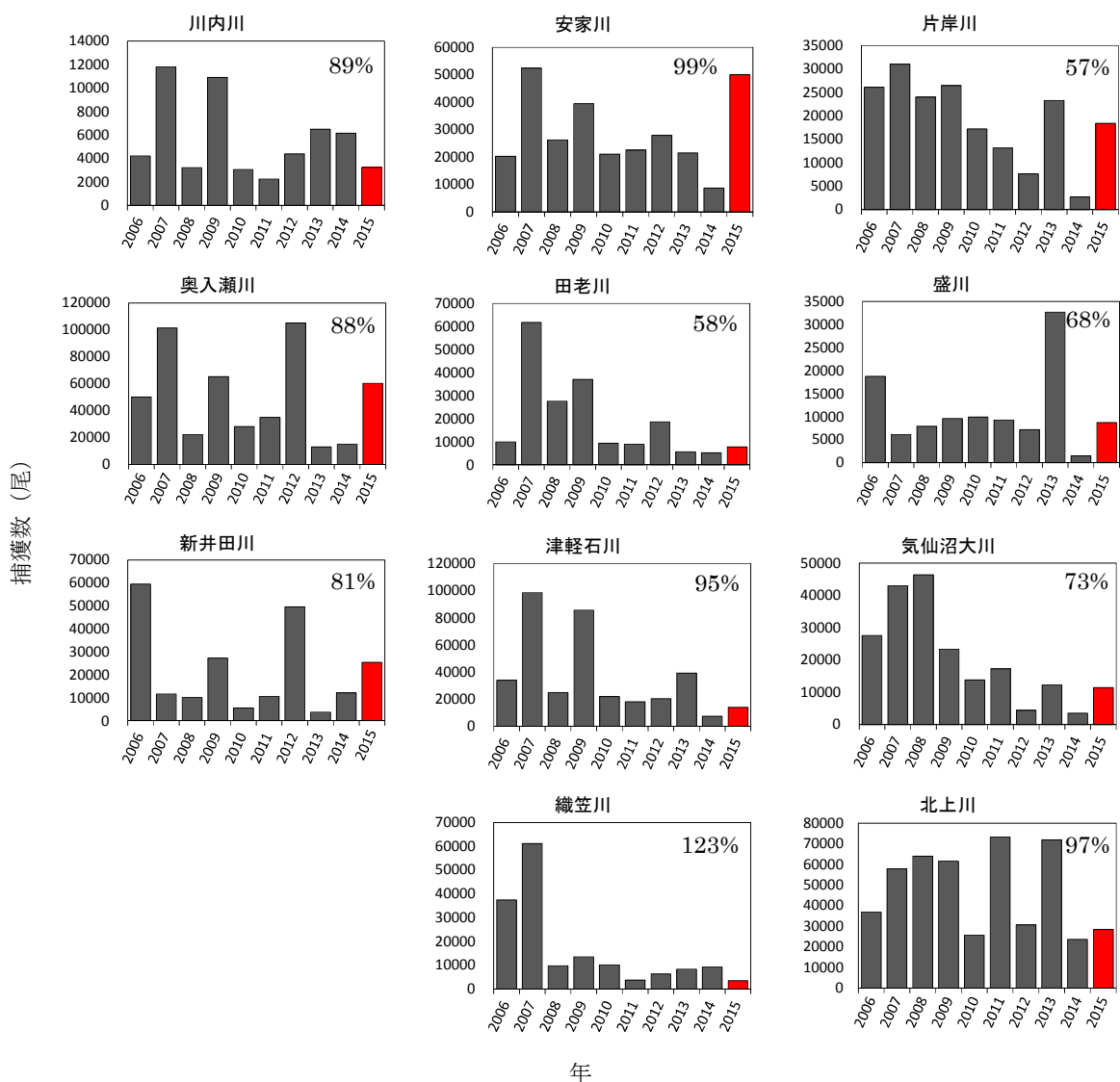


図3 4年魚の河川捕獲数（12月31日現在までの累計値）の経年変化。図中の割合は「2011年級放流数／2009年級放流数×100」を示す。

・5年魚（2010年級）の河川捕獲状況（図4）

震災年に放流された5年魚の河川捕獲数は、青森県の奥入瀬川、岩手県の安家川、田老川、津軽石川、片岸川、盛川、宮城県の気仙沼大川において、過去10年間で最も少なくなっており、津波被害が甚大であったサケふ化場を有する河川（図2）において、例外なく5年魚の減少が顕著となっています。一方、津波被害がなかったふ化場を有する河川である青森県の奥入瀬川、岩手県の織笠川は、2006年以降で低い水準の捕獲数となっています。

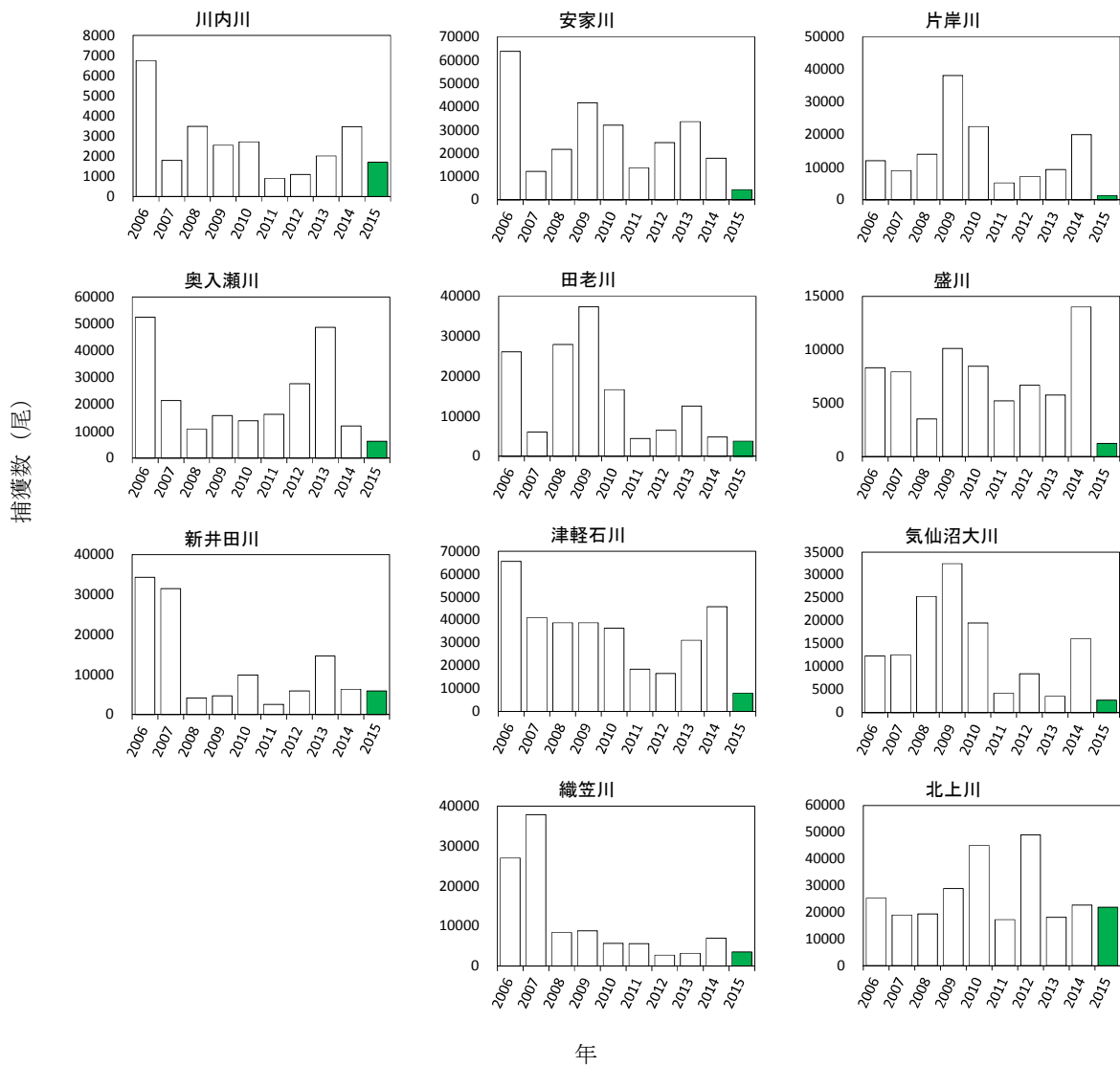


図4 5年魚の河川捕獲数（12月31日現在までの累計値）の経年変化

・年齢別河川捕獲数（図5）

津波被害が甚大であったふ化場を有する津軽石川では、5年魚の顕著な減少に加えて、4年魚の減少も加わって、2006年以降で最も少ない捕獲数となっています。また、津波被害がなかった織笠川では、4年魚、5年魚ともに減少しており、2006年以降最も少ない捕獲数となっています。

一方、津波被害が甚大であったふ化場を有する安家川、片岸川、盛川において、5年魚は減少しているものの4年魚よりも若齢の回帰尾数が増加したことにより平年並みの捕獲尾数となっています。

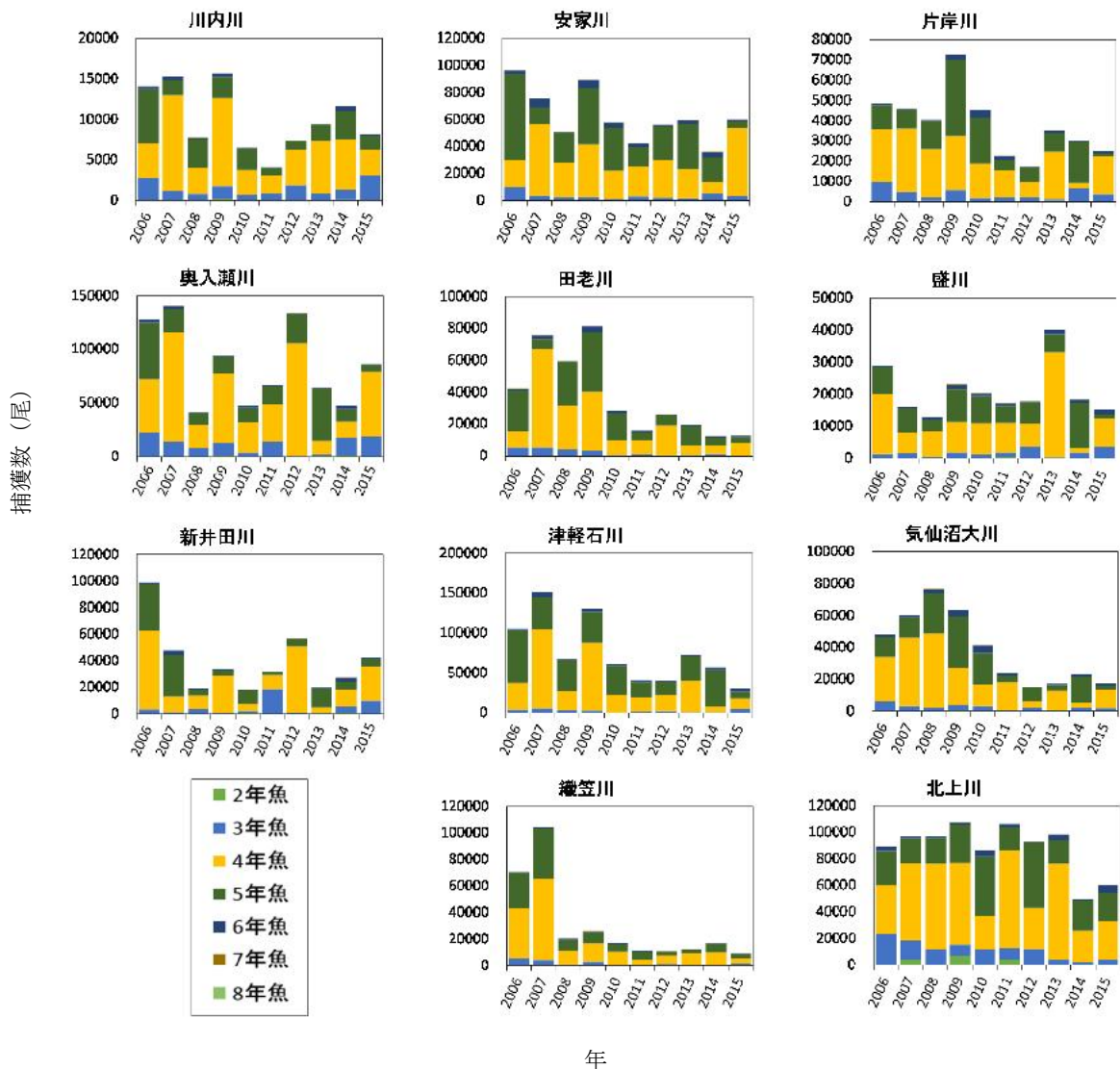


図5 年齢別の河川捕獲数（12月31日現在までの累計値）の経年変化